

## ラフカディオ・ハーンの『古事記』世界

—B・H・チェンバレン著 *Kojiki* の舞台、出雲を手がかりとして—

### 三 成 清 香

#### I ハーンと出雲地方

ハーンにとっての松江を考えたい。『古事記』の舞台である出雲地方は、ハーンにとって、生まれ故郷のギリシャを思わせる、神々が集う場所であった。ハーンが『古事記』に誘われ滞在を決めた松江の地は、彼の思惑通り、否、それ以上の日本の姿を彼に見せた。わずか1年3ヶ月の滞在中、ハーンの中に一つの〈日本〉が形成されたと言っても過言ではない。それゆえ、「ハーンが日本滞在を始めた最初の場所」以上の意義があるとして注目されてきた。

池田雅之氏は、松江を「ハーンにとって、まだ西洋文明がその世界においてとうに駆逐したはずの異端の神々が住み給う聖なる都であった<sup>1</sup>」とし、彼が生まれ故郷のギリシャと出雲地方を類推し、一つのユートピアとして捉えていたと述べている<sup>2</sup>。その宗教的な側面から、或いは壮大な自然や純朴な人々との出会いから、ハーンにとっての松江は非常に重要な意味を持つようになる。しかもこれが単なる短期的な感情ではなく、晩年まで続くいわば一つのトポスとして彼の中に息づいたことを、池田氏は以下のように指摘する。

異境で暮らすこの「驚きと喜び」は、最晩年の『神国日本』の中でも繰り返し表れている。そこには、ハーンの鎌倉や松江や出雲に代表される〈永遠の日本〉というイメージが、来日以来十四年経った晩年においても、変化をきたしていないことがうかがい知れる<sup>3</sup>。

そこで本稿では、ハーンにとっての松江を含む出雲地方全体が、単なる一つの場所ではなく、「知のトポス」となると仮定し、検証する。とりわけ、『古事記』の舞台としての出雲地方に注目し、ハーンの神々との出会いが、彼に如何なる影響を

及ぼしたのかに迫りたい。筆者が現在関心を強く抱くのは、近代化と対峙する場所出雲地方がハーンの〈永遠の日本〉とどのように重なっているのかという点である。言い換えれば、出雲の如何なる事物が、彼の中で如何に蓄積され〈永遠の日本〉を構築していったのかということ、改めて明らかにしたいのである。

この「ラフカディオ・ハーンの中に、出雲地方が如何に存在していたのか」を浮き彫りにすることで、出雲という「トポス」と、ハーンが求め続けた〈永遠の日本〉との呼応に迫る研究において、本稿では、出雲という地がハーンにとって知的な面を強く刺激し、彼の中のパラダイムを転換した「知のトポス」として存在したことを明らかにすることを目的としている。そして、この「知のトポス」形成の過程の第一段階として『古事記』の存在に注目する。

#### II 受け継がれるハーンの『古事記』世界

日本時代のハーンを知ろうとするとき、まず彼を日本へと誘った翻訳版『古事記』*A Translation of the 'Ko-Ji-Ki'* (1883) (以下 *Kojiki* とする) の存在に注目することから始めなければならないだろう。わずか33歳の若き日本学者B・H・チェンバレンによって英訳された *Kojiki* は、それまでいくつかの要因から日本へ関心を抱いていたハーンに渡日を決意させるに足るものであった。ハーンがこれを最初に手にしたのはアメリカ時代で、ハーパー社の美術主任ウィリアム・パットンから渡された時のことであった。そして、極東の地に存在する多くの神話に魅了された彼は、本格的に日本行きを決めたのである。さらに、横浜到着後、改めてこの著作を購入し、かなりの書き込みをしながら精読したことが知られている。

そして、ニューヨークのハーパー社の現地特派

員として来日したハーンは、その契約をまもなく破棄し、日本に関する書物を著すため長期滞在をすることを決意する。そして彼が選んだ場所こそ、『古事記』の舞台島根県であった。ハーンが松江への赴任を決意したのは、「日本紹介という野心を十分に満足させる土地柄であるという判断<sup>4</sup>」があったからである。古い文化や風習が根強く残っている裏日本の、神々が集う『古事記』の舞台である出雲地方へ向かうことで、他の外国人が見ることのなかった日本を発見できるという強い確信があった。ハーンは来日前、既に *Kojiki* を介して「日本」に魅せられ、来日後、幸運にもその聖地で本格的な生活を始める機会を得たのである。

それでは、この『古事記』について、私たち日本人はどれだけ知っているだろうか。何年に、誰によって書かれ、どこで発見されたのかといったことだけではなく、その内容についてどれ程の知識があるだろうか。これについて、阿刀田高氏は次のように述べている。

私は昭和十年生まれで、第二次世界大戦あたりの教育を受けて育ちました。『古事記』というのは、歴史の時間に習うことが多かった。子ども心にもヤマタノオロチや天の岩戸とかは本当ではないのではないだろうか、と思っている、非国民と言われるので考えないようにしていました。

天照大神という大変偉い女神様がいて、我が家でも拝んでいました。昭和天皇は神武天皇から数えて百四十九代目であると教えられ、天照大神の子孫だと教えられた。大和朝廷が連綿と続いていることを学んでいたわけです。主だった『古事記』の話は、大体その時代に仕入れました。(中略)

昭和二十年になり、戦争に負け、日本はべちゃんこにされてしまった。日本は間違っていたということになり、『古事記』のような文学作品、古典が読まれなくなりました。天照大神が国を作ったのは嘘だと言われ、教育現場で『古事記』を習うことがほとんどなくなりました。(中略)

昭和二十年以降の教育を受けた方は、みず

から『古事記』を学ばない限り、知識の中からずとんと抜け落ちてしまっていると思います<sup>5</sup>。

このように『古事記』は、大戦前か後かでその扱われ方が大きく変わり、現在では「日本最古の歴史書」ということ以外、ほとんど触れられることはない。そしてそこに描かれた神話に光が当たらなくなってからもう半世紀以上が過ぎているのである。

ところで、古い日本文化に憧れを持って来日する欧米人の中には、ハーンの日本での処女作『知られぬ日本の面影』を携えてくる人も未だにいるのだという<sup>6</sup>。この著作は *Kojiki* を精読したハーンが、彼が体験した実際の日本文化、日本社会にその世界を投影させ著したものであり、この点で『古事記』を当時の、そして現代の世界に伝えたものだといえる<sup>7</sup>。

つまり、教育現場から消された『古事記』は、現代の日本人にさえその姿を十分に見せることが叶わなくなっているが、その一方で、『知られぬ日本の面影』が『古事記』の存在を蘇らせているといえるのである。さらに言えば、現在われわれが出雲地方を「神々の国」だとか「神話の国」だとイメージするのは、『古事記』そのものの印象からではなく、ハーンの著作のおかげなのである。

そこで、ハーンが彼の著作に描きたした『古事記』のイメージについて、それが *Kojiki* とどのような点で異なっているのかに迫ることにする。つまり、チェンバレンにより体系的に翻訳された *Kojiki* よりも、それを読み来日したハーンにより著された『知られぬ日本の面影』の中に見る『古事記』世界に、これほどまでに多くの人が心を惹かれるのは、どういった要因によるものかを考えるのである。この問いは、ハーンの特徴的な日本観と、その価値が浮き彫りにしてくれるものであろう。

### Ⅲ ふたつの『古事記』

ハーンの『古事記』世界と、チェンバレンの *Kojiki* は、いくつかの点において異なっているが、その最たるものの一つに「出雲」の存在がある。端的に言えば、『古事記』の舞台の3分の1を占める「出雲」の地<sup>8</sup>が、実体験として文に表れて

いるか否かということである。池田雅之氏は、チェンバレンの『古事記』に対する姿勢を「あくまで十九世紀型の書齋派（アーム・チェアー）の学者」であるとし、対するハーンは「フィールドワーカーとして、出雲の『古事記』世界に身も心もどっぷりつかることができ」と述べている<sup>9</sup>。つまり、ハーンは横浜到着後、鳥根、熊本、神戸、東京と日本の中を転々とするが、『古事記』に関しては、その聖地とも言える「出雲」の地で、他の外国人が見ることのなかった「日本」を具に見ることができたのである。

ハーンは鳥根での仕事を紹介してくれた尊敬すべきチェンバレン教授に、杵築のすばらしさを伝え、チェンバレンもこの地に足を運ぶように、次のような手紙を書いている。

わたくしの随行者は——たぶん、確たる根拠もなしにでしよう——わたくしのことをあなたの友人だと話したのです。すると、そう述べたことが喜びのささやきを呼び起こしました。あなたのお名前は、杵築では非常な尊敬の念をもってうけとめられていると、わたくしははっきり断言申し上げます。ですから、万一あなたが杵築においでになったとしたら、あなたは神々の長でもあるかのように歓迎されるに違いないと思います。そして、あなたがこれらほんとうに上品で気高い人々を気に入られることもまちがいありません<sup>10</sup>。

教育熱が非常に高かった鳥根県において、チェンバレンは東京帝国大学の教授として多くの人に名が知られていたことは想像に難くない。ハーンの言うように、もしチェンバレンが訪問していたら、鳥根の人々は「神々の長でもあるかのように」チェンバレンをもてなしただろう。しかし、チェンバレンが鳥根へ訪れることはなかった。それは、彼が病弱であったこともあるだろうが、それ以上にその必要性を感じていなかったからだとと言えるだろう。つまり、チェンバレンにとっての『古事記』は、原話を英訳する対象以上のものではなかったのである。池田雅之氏によると、チェンバレンは1880年頃にイギリスに一時帰国し、比較神話学者マックス・ミュラーから勧められて、『古事記』

の翻訳に着手したという。そして氏は、チェンバレンの『古事記』翻訳の動機が、「イギリス学会への寄与」であり、必ずしもその物語性や文学性に関心があったとは言えないと述べている<sup>11</sup>。また同様に斎藤英吉氏も次のように述べている。

また神話の内容を理解するうえでは、(チェンバレンは)当時の比較神話学、人類学をリードしているイギリスのマックス・ミラーやエドワード・タイラーなどの影響を受けている。とくに近年、書簡資料などの調査から、チェンバレンがオックスフォード滞在中に『古事記』翻訳を決意したこと、そのきっかけがマックス・ミラーからの提言であったこと、またタイラーに宛てた書簡なども発見されるなど、チェンバレンが日本研究者としてイギリスの学会に寄与せんと考えていたことが明らかにされている<sup>12</sup>。

( )内は筆者

19世紀半ば頃の風潮として、大帝国イギリスでは、植民地主義政策と同時に、世界の未開の国々の文化や風俗、習慣などに多くの人の関心が向かうようになっていた<sup>13</sup>。そのため、この時期にはチェンバレンの他にもウィリアム・アストンが『日本書紀』を英訳し、レオン・ド・ロニが『記・紀』をフランス語に訳し、カール・フローレンツが『日本書紀』をドイツ語に訳した<sup>14</sup>。東アジアで真っ先に開国した日本について、その「未開の地」を明らかにしようと、ヨーロッパでは『記・紀』に関心が集まっていたと言える。

そして、この流れの中でチェンバレンが行った翻訳は、言うまでもなく、それを勧めたマックス・ミュラーの「進化論」的な見方に追随するものであった。つまり、「未開の地」で古代に書かれた「神話」たちは、それ自体、文化的、歴史的、文学的といったことに何らかの意味があるのではなく、「言語の病」、すなわち「訳の分からない話」とか非論理的な物語として、如何に言語表現が表出していったのかという点においてのみ、見るに値するにすぎなかった<sup>15</sup>。

これについて池田雅之氏は、チェンバレンによる翻訳において、イザナギ、イザナミの国生みの



シーンが意図的にラテン語訳されている点に注目し、次のように述べている。

「天地の初め」の一節は、初めて性をもつ<sup>セックス</sup>夫婦神<sup>カップル</sup>の出現によって、日本の国土と神々の生成が行われるきわめてドラマチックな場面です。性のいとなみと生命の誕生の神秘をきわめて神話風に語った有名な箇所、私たちはここにおおらかな男女の交わりを感じ取ることはできるものの、卑猥なものを感じ取ることはないでしょう。(中略)

この箇所は、性 (sex) の営みと生命 (life) の誕生が一体となって、次々に命が成りゆく様、生命誕生のダイナミズムを感じさせる一節として読むべきでしょう。

さて、次に引用するのは、チェンバレンの問題の翻訳箇所です。次の英訳をご覧ください、冒頭の二行程は英訳されていますが、その後は見慣れないアルファベットの文字づらが並んでおり、(中略) ラテン語訳になっているのがおわかりになるかと思います。(中略)

チェンバレンは、このラテン語に変えた『古事記』の箇所(中略)をヴィクトリア朝のイギリスの倫理観からすると「猥褻」「みだら」と考えたのでしょう。ヴィクトリア朝時代は、「性」に対して抑圧的でタブー視する傾向が強かったからです。

このように、当時の社会状況を考慮したものだというのに、前述のような、イギリス中心的、「進化論」的な態度が反映されていることにも触れ、「ここにチェンバレンの『古事記』理解の問題点と限界が表れている」と指摘している<sup>16</sup>。ただ、これを「チェンバレンの」問題と限界だとしてしまうのは、少々かわいそうな気がする。当時、彼の仕事は理に適っていた、すなわち、最も一般的で、然るべき理論に基づいた、正当なものであった。「大英帝国」、「進化論」が言うまでもなく大義であり、その視点から「未開」の日本を記すことが求められ、その枠組みの中で、一学者として十分に寄与したと言えることも忘れてはならない。

一方、ハーンという人には、そのような「理に

適った」仕事をしようなどとは毛頭なく、もっぱらの関心事は、如何に独特で、それまでにない文章で日本を表現するかということであった。言い換えれば、日本学者の巨匠として『古事記』と向き合ったチェンバレンに対し、ハーンはそういった束縛から完全に自由であり得たのである。そこには、当時の彼の社会的な立場が関係している。

ハーンが『知られぬ日本の面影』において、『古事記』世界を描いたのは、その世界(出雲地方)に足を踏み入れた頃のことである。当時、彼は一お雇い外国人に過ぎなかった。そもそも、ニューヨークの出版社の特派員として来日したにもかかわらず、その契約をまもなく破棄したことで、ハーンは日本での滞在資金を調達できなくなった。松江での英語教師という職も、チェンバレンの斡旋のおかげでかろうじて得たに過ぎなかった。ギリシャで生まれ、イギリス、アメリカ、西インド諸島などを転々とした彼は、日本でも根無し草になりかねない状況だったのである。

繰り返すが、チェンバレンは23歳で来日を果たし、24歳の若さで海軍兵学寮の教師、41歳で東京帝国大学の英語教師に就任した謂わばエリートであり、ハーンとは境遇が非常に異なっていた。それ故、彼らの日本に対する姿勢は、否が応でも異質なものとならざるを得なかったのである。

ハーン自身、それまで社会的地位のある外国人たち<sup>17</sup>によって描かれた日本に自分が改めて向き合う際、そこにどのような価値を持たせるのかという問題について、明確な計画を持っていた。以下は、来日直前1889年11月に書かれたパットン宛ての手紙であり、そこにはハーンの具体的な計画を見ることができる。

親愛なるパットン氏へ

日本ほど人がよく歩いて調べた国について本を書こうと考えると、まるきり新しいことを発見することは望めません——慎重に考えても同じだと思います。できるかぎり全く新しい方法で物事を考えてみることができるだけでしょう。私はこれまでの本に、能力の許すかぎり「いのちと味わい」を注ぎ込むのです。旅行家であれ学者であれ、その作者たちの報告や説明よりもっと生き生きした印象を

与えるのです。(中略)

エッセイ形式のものは本当に全く考えていません。主題はもっぱらそれに関係した個人的体験に基づいて考えることにし、平凡な物語に類したものは注意深く避けます。狙いを考え抜き、読者の心に日本で「生活している」生き生きした印象を与えるのです。——単なる観察者ではなく、普通の人々の日常生活に参加し、「彼らの考え方で考える」感じをもつてほしいのです<sup>18</sup>。

(下線は筆者)

このように、それまでの外国人が、日本を「未開の地」と見做しているのに対し、ハーンにとっての日本はすでに多くの外国人によって「踏み均された場所」であり、後発者としての意義は、全く新しい方法で、日本という題材と向き合うということであった。そして、それまでの本に描かれた<日本>には、「いのち」と「味わい」が欠如しているとし、ハーン自身が日本の生活に溶け込み、日本人の視点から日本を見ることで、それらを表現することを目的とした。そして結果的に、ハーンによって彩られた『古事記』世界は、現在もわれわれの心に響き続けているのである。

さらに、ハーンの視点や描写を独特なもの足らしめる要素として、ハーンの中に流れている血があるだろう。つまり、彼のギリシャ的な要素こそ、チェンバレンを含む他の外国人とは根本的に異なっている重要な部分だということである。ハーンは著作や書簡などで、自分がギリシャ的な人間であることを述べてきた。これについては、単純にハーン自身が言うように、彼をギリシャ的な人間と見做すわけにはいかない問題もある。遠田勝氏は、ハーンの「ギリシャ性」について、次のように述べている。

ハーンは、自伝的作品や書簡において、しばしば、自分はギリシア人であると告白している。彼がそうした民族的文化的アイデンティティを自覚していたことに間違いはないのだけれども、それではそのギリシアという観念は、どのような体験と教育と知識に由来するのか、この点を調べてゆくと、出てくる

のはむしろ否定的な答え——つまり、生母がギリシア人であったということのをのぞけば、彼とギリシア文化とのあいだには実質的なつながりがほとんど存在しないという事実なのである<sup>19</sup>。

氏の主張の通り、ハーンとギリシャとの直接的なつながりはほとんどないと言える。だが、ここで問題なのは、実際にハーンとギリシャがどれだけのつながりがあったかということではなく、彼自身がどれほどそこに自我を置いていたのかという点である。これについて、ハーンが弟ジェイムスに宛てた書簡を例として見てみよう。

私の魂は父とは無縁だ。私にどんな取り柄があるにせよ、そして必ずや兄に優るはずのお前の長所にしても、すべては私たちがほとんど何も知らない、あの浅黒い肌をした民族の魂から受け継いだものだ。私が正しいことを愛し、間違ったことを憎み、美と真実を崇め、男女の別なく人を信じられるのも、芸術的なものへの感受性に恵まれ、ささやかながら一応の成功を収めることができたのも、さらには私たちの言語能力が秀でているのも（お前と私の大きな眼はその端的な証拠だが）、すべてはお母さんから受け継いだものだ<sup>20</sup>。

ハーンにとって、自らの中に流れるギリシャの血は、慕い続ける母への思いと重なり、自身への誇りとなった。それゆえ、西洋至上主義的な考えは、キリスト教同様、彼が最も嫌うところであった。しかし、もちろん当時の状況を考えると、それまで多くの人によって一つの方向から見続けられた<日本>を、全く異なった角度から見つめなおし、再び描き出すハーンの作業は、大波に立ち向かう小舟に過ぎなかった。時代は、ハーンを「夢想に耽るロマン主義的オリエンタリストの放浪者<sup>21</sup>」とし、彼の描く日本は、実際には存在しない空想の世界であるとも評した。だが、その小舟は沈没することなく、荒波を抑え、現代のわれわれの前に姿を現している。

それでは次に、ハーンによって描かれた『古事記』世界が如何なるものであったのか、いくつかの部分を用いながら検討してみたい。

#### IV ハーンの『古事記』世界と出雲

ハーンの描き出した『古事記』世界が、チェンバレンのそれと大きく異なっている要因の一つに、チェンバレンが単なる文献の読解をしたに過ぎないのに対して、ハーンは実際に『古事記』の舞台、出雲で改めてその世界を感じ、描き出したということがある。さらに、これはハーン自身が、かなりその部分を強く意識していた、言い換えれば、単なる「文献学的な読解の段階<sup>22</sup>」を超えるものを書こうとしたということは前述の通りである。

そして、その願望を叶え得る地こそ、「出雲」であった。それは、単に出雲地方が『古事記』の舞台だからということではなく、その地理的、歴史的な条件が相まってハーンの筆を走らせたといえる。以下は、ハーンが如何に出雲の地に魅了され、古事記の舞台に思いを馳せていたのかが分かる描写である。

まさにこの大地の中に、——幻のような青い湖水や霞に包まれた山並に、燦々と降り注ぐ明るい陽光の中に、神々しいものが存在するように感じられる。これが、神道の感覚というものなのだろうか。私はあまりにも『古事記』の伝説に胸を膨らませていたせいか、リズムカルに響く船のエンジン音までが、神々の名と重なり合って、祝詞を唱えているかのように聞こえる。

コトシロヌシノカミ  
オオクニヌシノカミ<sup>23</sup>

この描写からも分かるように、当時の出雲地方はハーンがそれまでに滞在した都市部（東京や横浜）とは異なり、豊かな自然が残っていた。ここにある「青い湖水」とはハーンが特に好んだ宍道湖のことであろう。穏やかに波が棚引いている宍道湖の様子は、『知られぬ日本の面影』でも美しく描写されている。ここで、その部分を確認してみたい。

その水面は宍道湖へと注ぎこみ、灰色に霞む山々の縁まで右手方向に大きく広がってい

る。(中略)

ああ、なんと心惹かれる眺めであろうか。眠りそのもののような靄を染めている、朝一番の淡く艶やかな色合いが、今、目にしている霞の中へ溶け込んでゆく。はるか湖の縁まで長く伸びている、ほんのり色づいた雲のような長い霞の帯。それはまるで、日本の古い絵巻物から抜け出てきたかのようなものである。この実物を見たことがなければ、あの絵巻物の風景は、画家が気まぐれで描いただけだと思うに違いない。

山の麓という麓が霞に覆われている。その霞の帯は、果てしなく続く薄い織物のように、それぞれ高さの違う頂を横切るように広がっている。その様子を日本語では、霞が「棚引く」と表現している。そのために、湖は実際よりずっと大きく見える。いや、現実の湖というより、むしろ暁の空の色が溶け込んだ美しい幻の海に見まがいそうである。(中略) その風景は薄靄がゆっくりゆっくりと立ち上るにつれて、たえず違う顔を見せ続ける、えも言われぬ美しい混沌の世界である<sup>24</sup>。

この文章から、彼が松江時代初期に滞在した旅館から見える宍道湖の景色に、如何に恍然としていたかが想像できる。



【図1】ハーンが愛した宍道湖の風景<sup>25</sup>

また、「霞に包まれた」景色とは、小泉凡氏のいう「vapor tone<sup>26</sup>」（霧の風景）のことである。これには、ハーンの視力が弱かったことに加え、この地が山陰地方に属し、太平洋側よりも曇りがかった天気が多かったことも因んでいると考えら



れる。朝には、霧がかった宍道湖に、小舟が浮かび、人々が太陽に祈りをささげる姿を見、何か「神々しいもの」や「神道の感覚」を感じ取ったのではないだろうか。出雲という地が、大自然の中に存在していたことは、或いは近代化から取り残されていたと見ることもできよう。確かに、現在も「裏日本」と呼ばれるこの地は、鉄道の開通が山陽地域に対して、20年も遅れたことで、近代化に乗り遅れていた面があった<sup>27</sup>。だが、このことがハーンにとってはこの上ない魅力として映ったのである。そして、この地で響く小型船のエンジン音が、コトシロヌシノカミ「事代主神」、オオクニヌシノカミ「大国主神」とハーンの耳に響くまでに、彼は『古事記』の世界に心酔していった。

それでは、先に述べたチェンバレンによる「淫らな」古事記の箇所について、ハーンがどのように描写しているのかを見てみよう。

日本には、神国という尊称がある。そんな神々の国の中でも、一番神聖な地とされるのが、出雲の国である。この国を生み、神々や人間の始祖でもある伊邪那岐命と伊邪那美命が、青い空なる高天原より初めており立たれ、しばらくお留守りになったのが出雲の地なのである。

伊邪那美命が埋葬されたという地も、出雲の国境にあり、そこから伊邪那岐命は亡き妻の後を追って、黄泉の国へと旅立ったのだが、ついに連れ戻すことはできなかった。その冥土への旅と、そこで遭遇した事の次第は、『古事記』に残されている。あの世のことを描いた古代神話は数々あるけれど、これほど不可思議な物語は聞いたことがない。アッシリアのイシュタルの冥界下りでさえ、この話には足許にも及ばない。

出雲はとりわけ神々の国であり、今もなお伊邪那岐命と伊邪那美命を祀る、民族の揺籃の地である。その出雲において、神々の都とされる杵築に、古代信仰である偉大な神道の、日本最古の神社がある。

私は『古事記』で出雲の神話を読んで以来、かねがね杵築を訪ねてみたいと思っていた<sup>28</sup>。

ハーンが伊邪那岐命と伊邪那美命の国生みのシーンについて言及するとき、出雲の地は一番「神聖な地」であり、出雲大社は「古代信仰である偉大な神道の、日本最古の神社」であった。この描写からは、国生みという神話が「淫ら」だとか、「未開の地」で古代に書かれた「訳の分からない話」だという印象は見受けられまい。逆に、メソポタミアに伝わる「アッシリアのイシュタルの冥界下り」ですら、この話の足元にも及ばないと評しているのである。これについて、小泉凡氏は以下のように述べている。

「杵築」には、昇殿する八雲を出迎えた神官たちの不動の姿から、幼い頃見ていたアッシリアの占星術師の一团を描いたフランス製の版画を思い出したという記述があるので、子どもの頃からアッシリアという国名、あるいはメソポタミアの文化に、母方の血筋との親近性と一種のエキゾティズムを感じていたのかもしれない。

もちろん、ギリシャ神話のオルペウスやペルセポネの物語にも思いを馳せたことでしょう。(中略) 比較神話学者の吉田敦彦氏によれば、冥府で主人公が「見るなのタブー」を犯して亡妻の連れ戻しに失敗したという、狭義の意味での「オルペウス型神話」は、ユーラシアではギリシャと日本にしかないことを指摘し、その伝播の可能性を説いています<sup>29</sup>。

(下線は筆者)

これまでも言われてきているように、ハーンは常に自らの中に流れるギリシャ的な側面から物事を捉えようとした。『古事記』に関しても例にもれず、他の欧米人のような視点からではなく、彼の中に流れるオリエンタルな部分からその世界を見続けた。彼の中には、東洋（ギリシア）人としての血だけでなく、西洋（アイルランド）人としての血も流れていたが、母親から受け継いだ彼の東洋的な側面が、彼を「西洋至上主義」的な考えから遠ざけた。さらに言えば、彼のそのような部分が自らを日本へと溶け込ませ得たのである。それ故、日本への視点に「いのち」と「味わい」を付与することを可能にした要因の一つに、ハー

ンの中のギリシャ的なアイデンティティの存在があると言えるのではないだろうか。

そして、ハーンの『古事記』世界に「いのち」と「味わい」を与えた要素として、見過ごすことができないのが、出雲の地である。ここからは、出雲地方が、ハーンの『古事記』世界に如何に寄与したかについて、「稲佐の浜」に関する神話に関して、二つの部分を取り上げたい。



【図2】二つの神話の舞台となった稲佐の浜<sup>30</sup>

稲佐の浜とは、出雲大社の西にある海岸で、10月（神在月）に、全国の八百万の神々がまずこの浜へ降り立ち、出雲大社へと向かう浜として知られている。また、『古事記』の中でも有名な二つの神話がここで繰り広げられた。それは、「国引き」と「国譲り」の神話である。ここでは、これら二つの神話をハーンがどのように描き出したのかについて見ていくこととする。

まず「国引き」神話である。この物語が、彼の著作のどの部分で触れられているかに注目すべきであろう。中でどの部分に位置しているかに注目すべきだろう。それは、ちょうど杵築（現出雲大社）への道のりの中に描かれている。

太古の昔、出雲の神様は、国土を見渡し「八雲立つ出雲の国は、小さく作りすぎたようだ。ほかの土地をつなぎ合わせて、大きくして進ぜよう」といい、はるか朝鮮まで望み見て、格好の土地を見つけられた。そしてそこから、太い縄で四つの島を出雲までお引き寄せになったのである。

最初に引き寄せた島が八百丹で、現在、杵築のある場所にあたる。二番目の島は狭田の

国で、ここにある佐太神社では、毎年一回、全国の神々が杵築に参集なさった後、二度目の集いをされる。三番目は闇見の国で、今の島根郡にあたる。四番目は、稲田を守る白い祈願のお守りが配られる美保神社のある、美保関である。それらの島々を、はるか海の彼方から引き寄せるために、出雲の神様は、太い縄を巨大な大山と佐比売山にかけた。どちらの山にも、今でもそのときの縄の跡が残っているという。更に縄そのものは、その一部が夜見ガ浜という昔の細長い島や藪の長浜になった<sup>31</sup>。

堀河を過ぎると、道は狭く次第に悪くなるが、北山には近づいていく。日が沈む頃には、山の木立が見分けられるようになってきた。さあ、道は登り坂になる。深まる夕暮れの中、俵はゆっくりと山道を登ってゆく。すると目の前に無数のきらめく灯火が見えてきた。いよいよ神々の都、杵築だ<sup>32</sup>。

このように、文の前半部分は、「国引き」神話の概略である。この中で、杵築（八百丹）、狭田の国、島根郡（闇見の国）、美保関の4つの場所と、大山、佐比売山、山夜見ガ浜を紹介している。これらの場所は、必ずしも『古事記』と絡めて書き記すという方法だけではなかっただろう<sup>33</sup>。都市部には見られない広大な田畑や、悠々と流れる斐伊川の様子、連なる山脈など、『古事記』を念頭に置かずしてもその美しさを描き出すことは可能であったと考えられる。しかし彼にとって、これらは『古事記』の時代から続いている特別な場所であり、自らがまさに向かおうとしている大社おおよしろへと繋がる意義深い事物であった。つまり、彼が足を踏み入れようとしているのは、大昔に書かれた『古事記』の舞台ではなく、過去から続く現在の『古事記』世界であった。言い換えれば、「神話」を「現在」と切り離して考えるのではなく、「現在」の中に埋もれた『古事記』的要素をあぶり出し、表しているのである。彼の著作の中で、『古事記』は過去のものとして存在してはいない。彼の目に映る風景は、『古事記』世界から続いている事実としてそこにあるのである。この描き方は、「国譲り」の部分からも見て取れる。



【図3】因佐神社<sup>34</sup>

この浜は今では人気の海水浴場で、居心地のよさそうな小さな旅館や可愛らしいお茶屋が軒を並べている。稲佐という名は、大国主神が、初めて正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に、出雲の国の国譲りを迫られたという、神話の故事に由来している。つまり、稲佐という言葉は、そのときの「否か諾か」という諾否を問う意味になっているのだ。古事記の第一卷三十二章に記載されているその箇所をここに引用しよう。

この二柱の神（鳥船の神と建御雷之男神）は、出雲の国の伊那佐の浜に降り立ち、長い剣を抜き、それを波打ち際に逆さまに突き立てると、その剣の前にあぐらをかいて、多く荷主神にこう尋ねられた。「天照大神と高木神の仰せによって、そなたの意向を伺うために使いとして参った者である。そなたが領有している葦原中国は、わが御子が統治する国として任を受けられた国である。そこで、そなたの考えは如何なものか」

すると、大国主神は、こうお答えになった。

「私からはお答えできかねる。息子の八重事代主神の意見も聞いてみて下され」

……そこで、建御雷之男神は大国主神に向

かって、こうお尋ねになった。

「今、あなたの子の事代主神が、このように（承知しました）と申した。他に意見を問う御子はおるか」

すると大国主神が、「もうひとり、わが息子の建御名方神がおる」と言われた。……そうこうするうちに、その建御名方神が、千人引きの大岩を指先に差し上げてやって来て、「力競べをしてみたいものだ」と言った。……

この浜の近くに、因佐神社という小さなお宮がある。そこには、力競べに勝った建御雷之男神が祀られている。また浜には、建御名方神が指先で持ち上げたという巨大な岩が水面から顔をのぞかせている。それは千引の岩と呼ばれるものである<sup>35</sup>。

（下線は筆者）

このように、「今では人気の海水浴場」は昔、「大国主神が、初めて正勝吾勝勝速日天忍穗耳命に、出雲の国の国譲りを迫」った場所であると記している。出雲の人々が、「稲佐」と呼び、賑やかに夏を楽しむこの浜辺は、「否か諾か」の問答が行われた、重要な場所であるとしているのである。

また、【図3】を見ると分かるように、因佐神社は決して大きな神社ではないが、ハーンの描写の中では、ここも重要な場所の一つであった。現在でも、武運の神様として知られ、参拝後に鳥居を無言で、振り返ることなく通り抜ければ、勝負運がつくなどと言われるこの小さな神社は、「力競べに勝った建御雷之男神が祀られている」ことが由来しているのである。これらの描写からも神話を独立した昔の事実として捉えるのではなく、現実社会に確かに息衝くものとして考えていることが分かる。

以上、「国引き」と「国譲り」の神話の描き方を見てきた。ここまでで、ハーンの描き出す『古事記』世界が、彼の思惑通り、単なる文献の翻訳ではなく、それが如何に当時の社会に生きているのかということにまで言及していることが明らかになった。この試みは、確かにいくつかの点で当時の主流なやり方からは逸脱していたと言えるだ

ろう。だが、日本に関する書籍を多読していた彼が、その方法に従い、同じように日本を描写していたならば、現在、これほどまでに注目を浴びることはなかったと断言することができるだろう。彼の文章にある「いのち」と「味わい」に、我々は今でも心惹かれているのである。

## V 新たな『古事記』世界が示すもの

ここまで見てきたように、彼の著作にはそれまで他の外国人によって描かれなかった日本の姿が、独特な方法で描かれている。それでは、ここで改めて、ハーンが<日本>とどのように向き合おうとしていたのか、彼の著作にどういった視点を取り入れようと考えていたのかが分かる部分を引用し、検討したい。

神道は西洋科学を快く受け入れるが、その一方で、西洋の宗教にとっては、どうしてもつき崩せない牙城でもある。異邦人がどんなにがんばったところで、しょせんは磁力のように不可思議で、空気のようにとらえることのできない、神道という存在に舌を巻くしかないのだ。実際に優秀な学者であれ、神道とは何たるかを、解きあかすことはできなかった。

神道を単なる先祖崇拜だとする者もいれば、それに自然崇拜が結びついたものだとする者もいる。神道とは、およそ宗教とは定義できないとか、無知な宣教師たちには、最悪の邪教だとか言われたりもした。神道を解明するのが難しいのは、つまるところ、西洋における東洋研究者が、その拠り所を文献にのみ頼るからである。つまり、神道の歴史を著した書物や『古事記』『日本紀]、あるいは「祝詞」、あるいは偉大な国学者である本居や平田の注釈本などに依拠しすぎたせいである。ところが、神道の神髄は、書物の中にあるのでもなければ、儀式や戒律の中にあるのでもない。むしろ、国民の心の中に生きており、未来永劫滅びることも、古びることもない、最高の信仰心の表れなのである。

風変りな迷信や、素朴な神話や、奇怪な呪術のずっと根底に、民族の魂ともいえる強力

な精神がこんこんと脈打っているのである。日本人の本能も活力も直観も、それと共にあるのである。したがって、神道をわかろうというのなら、その日本人の奥底に潜むその魂をこそ学ばなければならない。なにしろ日本人の美意識も、芸術の才も、豪勇の熱さも、忠誠の厚さも、信仰の感情も、すべてがその魂の中に代々受け継がれ、はてには無意識の本能の域にまで至っているのである。

自然や人生を楽しく謳歌するという点でいえば、日本人の魂は、不思議と古代ギリシア人の精神によく似ていると思う。それは、誰しも認めることではないだろうか。私は、そんな日本人の魂を多少なりとも理解できればと思う。と同時に私は、いつの日か、古くは「神の道」と呼ばれたこの古代信仰の、今なお生きているその偉大な力について、語れる日が訪れることを信じてやまないのである<sup>36</sup>。

(下線は筆者)

この文章が、一人の「西洋人」によって、しかも1890年代前半に書かれたものであることに驚嘆する。それは、まず、西洋至上主義が普遍的な考え方であった時代に、これほどまでにその旧套から<sup>37</sup>自由であり得たこと、言いかえれば「Open Mind」であったことにおいてである。「文献に頼らない」ことを明言し、先行のものを超える魅力を与えるという、前代未聞の試みを、ハーンは<日本>という題材を持って行おうとした。

そして、これについて本稿では3つを挙げて論じてきた。

まず一つ目は、彼の社会的立場である。幕末から明治初期にかけて来日した西洋人たちは、高学歴者が多く、必然的にエリートであった。対して明治23年に日本へ来たハーンは、そういった集団に属さない存在であった。それが、ハーンを自由にした。ここでいう、「その拠り所を文献にのみ頼る」「西洋における東洋研究者」は、取りも直さずチェンバレンをはじめとするそれまでのエリート日本学者たちのことを指しているだろう。彼は、自身を彼らとは異なった視点から、同じ題材を、全く異なった方法で描き出すとしているのである。

そして、それを可能にしたのが二つ目の要素である。それは、ハーンがギリシヤ的な自分を強く肯定したい気持ちがあったことである。彼の中でのギリシヤは、東洋的な世界であり、そこに母の面影を感じた。またそこには、父親の存在やキリスト教を含む「西洋」への嫌悪があった。このことは、従って、それまでの西洋における普遍的な考え方に彼が追随することを拒ませた。自らの「オリエンタル」な部分を強く信じるのが、彼自身を日本社会へと溶け込ませた。これは他の外国人が試みようとしなかったことであり、日本への新たなアプローチとなった。

そしてこれらの要素に加え、『古事記』の舞台出雲地方と、そこに存在する多くの神々が、ハーンの『古事記』世界に「いのち」と「味わい」を与えたことが明らかになった。つまり、出雲の地理的、歴史的、文化的な魅力にハーン自身が浸ることで、それまでどの外国人も見ることのなかった世界を見、描き出すことに成功したのである。時に、『古事記』世界が描かれた『知られぬ日本の面影』は、盲目的に日本を愛したハーンの夢物語であったなどと評されたこともあるが、筆者はハーンが「出雲の地」を詳細に歩いて見たフィールドワークの成果であると解したい。そして、すっかり西洋化してしまった日本社会に生きるわれわれが、この著作に触れるとき、そこにはまさに「知られぬ日本の面影」が存在しており、われわれに懐古することを示唆してくれるのである。

ハーンの新たな『古事記』世界への挑戦は、彼が出雲地方という「トポス」から、＜永遠の日本＞の断片を見始めた初期段階にすぎない。このトポスが彼にどのような＜日本＞を提示し続けるのかは、次稿に譲ることとする。

られぬ日本の面影』が、今日でも『古事記』世界への道案内を果たしているのです。八雲経由での欧米人の日本理解の伝統は、脈々と続いています。現在のように、私たちが『古事記』を楽しめるようにしてくれたのは、本居宣長のお蔭をいえますが、古代の『古事記』世界を現代にしかも世界に繋いでくれたのは、小泉八雲という存在をおいてほかにいないでしょう。」(同上)。

<sup>8</sup> 高橋一清『古事記と小泉八雲』(かまくら春秋書房,2013) 226 頁。

<sup>9</sup> 池田雅之「生きるよすがとしての神話—ハーンとチェンバレンの『古事記』観」『古事記と小泉八雲』(かまくら春秋書房,2013) 90 頁。

<sup>10</sup> 小泉八雲『ラフカディオ・ハーン著作集 第十四巻』(恒文社,1992) 378 頁。

<sup>11</sup> 池田雅之(前掲載註 9) 95 頁。

<sup>12</sup> 斎藤英吉『古事記 不思議な 1300 年史』(新人物往来社,2012) 140 頁。

<sup>13</sup> 池田雅之(前掲載註 9) 95 頁。

<sup>14</sup> 斎藤英吉(前掲載註 12) 140 頁。

<sup>15</sup> 池田雅之(前掲載註 9) 96 頁。

<sup>16</sup> この点については、平川祐弘氏も以下のように言及している。「外国文化を客観的に判断するためには、判定する主体が揺るぎない価値判断の尺度を持たなければならない。バジル・ホール・チェンバレンは西欧文明とくに大英帝国のそれをもって基準とした。彼にとって道徳性の尺度も趣味性の尺度もヴィクトリア朝のそれだった。それだけにチェンバレンは『古事記』の冒頭を訳そうとして困惑を覚えた。(中略)「あなにやし、えをとこを」という高らかな声には人類の源泉の感情がこめられていて、この神代の神話はいかにもすばらしい。だがチェンバレンは顔を顰めて、伏字にする代りに、この条りをラテン語に訳した。」平川祐弘『破られた友情—ハーンとチェンバレンの日本理解—』(新潮社,1987) 63-64 頁

<sup>17</sup> 例えば、アーネスト・サトウやイザベラ・バードなどがこれらに当てはまるであろう。前者はロンドン北東部に生まれ、ロンドンユニバーシティ・カレッジで学んだ後、1862 年、すなわち明治維新開始前に、英国駐日公使館の通訳生として来日し、最終的には駐日特命全権公使にまで上り詰めた外交官である。後者は、当時としては珍しい英人女性旅行家であり、来日は 1878 年であった。彼女は英国国教会の牧師の長女として生まれ、母もまた牧師の娘であり、母方の兄弟には国会議員になったものもいるほど、知的にかなり高い水準の環境に生まれた。

<sup>18</sup> E・L・ティンカー『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』(ミネルヴァ書房,2004) 294 頁。

<sup>19</sup> 遠田 勝「アイデンティティと異文化理解：ラスカディオ・ハーンの場合」『近代 86』(神戸大学近代発行会,2000)

<sup>20</sup> 小泉八雲(前掲載 註 10) 423-424 頁。

<sup>21</sup> 斎藤延喜「ハーン的眼、ハーン的眼医者：幻想光学 I」『同志社大学英語英文学研究 85』(同志社大学,2009) 32 頁

<sup>22</sup> 池田雅之(前掲載註 9) 98 頁。

<sup>23</sup> ラフカディオ・ハーン著、池田雅之訳『新編日本の面影』(角川学芸出版,2010) 117-118 頁。

<sup>24</sup> ラフカディオ・ハーン(前掲載註 23) 74-75 頁。

<sup>25</sup> 島根県ホームページ [http://www.pref.shimane.lg.jp/shinjiko\\_nakaumi/isseiseisou/new\\_issei\\_seisou.html](http://www.pref.shimane.lg.jp/shinjiko_nakaumi/isseiseisou/new_issei_seisou.html) (2013.07.11 検索)。

<sup>1</sup> 池田雅之『ラフカディオ・ハーンの世界』(角川選書,2009) 42-43 頁。

<sup>2</sup> 同上。

<sup>3</sup> 同上 44 頁。

<sup>4</sup> 池野誠『小泉八雲と松江時代』(沖積社,2004) 12 頁

<sup>5</sup> 阿刀田高「日本神話とギリシア神話」『古事記と小泉八雲』(かまくら春秋書房,2013) 54-55 頁。

<sup>6</sup> 池田雅之『古事記と小泉八雲』(かまくら春秋書房,2013) 6 頁。

<sup>7</sup> これについて池田雅之氏は、次のように述べている。「日本人にとってのみならず、欧米の人々にとっても、『知



- <sup>26</sup> 小泉凡「八雲がとらえた日本の面影 霧(もや)に煙る風景」島根県ホームページ「島根県：連載随筆」<http://www.pref.shimane.lg.jp/kochokoho/esque/2007/No65/p17/p17.html> (2013.07.11 検索)。
- <sup>27</sup> 内藤正中氏は、20世紀に入ってから山陰地方が北陸地方とともに「裏日本」と呼ばれるようになった要因として、鉄道の開通が山陽地域に対して、20年も遅れたことを挙げている。当時、近代化を目指し大きな発展を遂げようと、どの地域もいきり立っていた中で、この20年という遅れは島根県に「後進的性格を特徴づける」結果になってしまったのである。内藤正中『島根県の百年』(山川出版社,1982) 3-4頁。
- <sup>28</sup> ラフカディオ・ハーン(前掲載註23) 115-116頁。
- <sup>29</sup> 小泉凡「小泉八雲が歩いた『古事記』の世界」『古事記と小泉八雲』(かまくら春秋書房,2013) 110頁。
- <sup>30</sup> 出雲観光協会ホームページ <http://www.izumo-kankou.gr.jp/213> (2012.07.11 検索)。
- <sup>31</sup> ラフカディオ・ハーン(前掲載註23) 124-125頁。
- <sup>32</sup> ラフカディオ・ハーン(前掲載註23) 125頁。
- <sup>33</sup> 例えば、イザベラ・バードは、「未踏の地」である東北地方や北海道を旅し、彼女の著作に描き出すとき、主に人々の服装、慣習、物音、子どもたちの様子などに注目していた。
- <sup>34</sup> 出雲神話めぐり旅ホームページ <http://www.izumo-shinwa.com> (2013.07.11 検索)。
- <sup>35</sup> ラフカディオ・ハーン(前掲載註23) 148-149頁。
- <sup>36</sup> ラフカディオ・ハーン(前掲載註23) 153-155頁。
- <sup>37</sup> 2010年、松江で開かれた「小泉八雲に捧げる造形美術展 THE OPEN MIND OF LAFKADIO HEARN ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)の開かれた精神」は、その後、ニューヨーク(2011年)やニューオーリンズ(2012年)で開催されている。

## 参考文献

- 池田雅之『ラフカディオ・ハーンの日本』(角川選書,2009)
- 池野誠『小泉八雲と松江時代』(沖積社,2004)。
- 池田雅之、高橋一清編『古事記と小泉八雲』(かまくら春秋書房,2013)
- E・L・ティンカー『ラフカディオ・ハーンのアメリカ時代』(ミネルヴァ書房,2004)
- 斎藤英吉『古事記 不思議な1300年史』(新人物往来社,2012)
- 斉藤延喜「ハーンの眼,ハーンの眼医者:幻想文学I」『同志社大学英語英文学研究 85』(同志社大学,2009)
- 遠田勝「アイデンティティと異文化理解:ラフカディオ・ハーンの場合」『近代86』(神戸大学近代発行会,2000)
- 内藤正中『島根県の百年』(山川出版社,1982)

平川祐弘『破られた友情—ハーンとチェンバレンの日本理解—』(新潮社,1987)

ラフカディオ・ハーン著、池田雅之訳『新編日本の面影』(角川学芸出版,2010)

出雲観光協会ホームページ  
<http://www.izumo-kankou.gr.jp/213>

出雲神話めぐり旅ホームページ  
<http://www.izumo-shinwa.com>

小泉凡「八雲がとらえた日本の面影 霧(もや)に煙る風景」島根県ホームページ「島根県：連載随筆」<http://www.pref.shimane.lg.jp/kochokoho/esque/2007/No65/p17/p17.html>

島根県ホームページ  
[http://www.pref.shimane.lg.jp/shinjiko\\_nakaumi/isseiseisou/new\\_issei\\_seisou.html](http://www.pref.shimane.lg.jp/shinjiko_nakaumi/isseiseisou/new_issei_seisou.html)

## 謝辞

本稿執筆にあたり、指導教員の丁貴連先生から厚いご指導をいただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。また有益なご意見をくださった丁研究室の皆様にも感謝いたします。

## **Kojiki World of Lafcadio Hearn: Focusing on the setting of Kojiki by B · H · Chamberlain, Izumo**

MINARI Sayaka

### **Abstract**

In this study I suppose that the Izumo district for Lafcadio Hearn is not just a place but “an intellectual topos” and inspected it. Especially I paid attention to the Izumo district as the stage of “Kojiki” and clarified what kind of influence impinge on him whether the encounter with gods.

As a result, the background of his unique “Kojiki” world was able to watch three elements. First, it was existence to belong nowhere; he was completely free about the outlook on Japan because he is not an elite like other foreigners. The second is that Hearn strongly affirmed oneself Greece-like. Greece among him was the Oriental world. And he felt a feature of mother there. Therefore he let himself refuse that he followed the universal way of thinking in the previous West. This way of thinking made him adapt to the Japanese society deeply. This was what other foreigners would not try to, and it became a new approach to Japan. The third Izumo direct as the stage “Kojiki” and many gods who existed there gave the world of Hearn’s “Kojiki” world “life” and “taste”. In other words, Hearn indulged in geographical, historic and cultural charm of Izumo. And he looked at the world that no foreigner was able to look at till then.

And when we who live in the Japanese society which has completely westernized read this book, there is “Unfamiliar Japan” and it propose to us that we should look back on old days.

(2013年7月16日受理)